

2006年豪華ラインナップ発表

東京バレエ団の公演予定は、2006年1月号にて掲載します。

2~3月 《マラーホフの贈り物》

日本のファンのためだけにマラーホフが選んだ仲間、そしてプログラムが届けられるスペシャル・プレゼント!



マラーホフ自身が厳選した出演者、そして演目が届けられる《マラーホフの贈り物》。同質の繊細さが響き合う、マラーホフのベスト・パートナーのひとりであるABTのトップ・スター、ジュリー・ケントとの共演をはじめ、2005年6月にベルリン国立バレエ団日本公演でヘアデビューを飾ったポリーナ・セミオノワとアルテム・シュビレフスキーという成長著しい新鋭コンビ。ため息がでるほどの美しさを誇るスヴェトラナ・ルンキナとセルゲイ・フィーンなど、見どころは尽きません。

4月 パリ・オペラ座バレエ団

『白鳥の湖』『パキータ』
名実ともに世界随一のバレエ団が、贅の限りを尽した豪華舞台。夢のような美しさがここに!

『白鳥の湖』



パリ・オペラ座が、3年ぶりの日本公演に選んだ演目は、名作『白鳥の湖』と『パキータ』。この2作品は、パリ・オペラ座が、エトワールからコール・ド・バレエの一人ひとりまでのレヴェルの高さを、あらためて見せつけることになるといえるでしょう。

パリ・オペラ座の『白鳥の湖』といえば、このバレエ団きってのオデット/オディールとして輝くエトワール、アリエス・ルテステュの魅力が大きく注目されますが、この作品の真の魅力には、主役だけでなく、群舞にも完璧なテクニックが不可欠。美しく揃った体躯、指の先一本に至るまで一糸乱れぬ群舞は、これぞ磨き抜かれた美しさを誇るパリ・オペラ座の『白鳥の湖』を堪能させてくれることとなるはずです。



『パキータ』

そしてスペインを舞台とした異国情緒あふれる『パキータ』。パリで初演されながら、その後失われてしまった19世紀前半のロマンティック・バレエの一つであるこの作品が、ビエラ・ラコットの復元によりパリ・オペラ座に蘇ったのは2001年のこと。有名なプティパ振付のグラン・パ・ド・ドゥはもちろん、ラコット独特の細かいステップが満載されたこの作品は、見応えある踊りの連続。これは即ち、パリ・オペラ座のダンサーの、世界に誇るテクニックが披露される場ということになるわけですから、見逃すわけにはいきません。

5月 ボリショイ・バレエ団

『ファラオの娘』『ラ・バヤデル』
ロシア・バレエの最高峰“ボリショイ”! エキゾチックな超大作を携え4年ぶりの来日。

片やエジプト、片やインドと、ロシア・バレエの最高峰“ボリショイ”が、4年ぶりの日本を圧倒するのは、エキゾティシズムの魅力! 愛と陰謀、そして幻想的な名場面が盛り込まれた『ラ・バヤデル』でボリショイ・バレエ団が見せるのは、主役陣から影の王国の群舞に至るまでの美しさと圧倒的な迫力。踊り手一人ひとりの質の高さ、力強さが発揮されるのが魅力です。また、婚約式でのさまざまなディヴェルティスマンのキャラクター・ダンスも見どころの一つ。ことに、迫力満点の「太鼓の踊り」は、他では見られないこれぞボリショイ!

『ラ・バヤデル』



9月 フィレンツェ歌劇場

『トゥーランドット』『ファルスタッフ』
オペラ発祥の地が威信をかけた舞台はイタリア・オペラの醍醐味そのもの。



近年、にわかにイタリアのオペラハウスの来日が数を増しました。イタリアの歌劇場はどこも、それなりにイタリア・オペラとの深い関わりをもって、いるといえるでしょう。しかし、そこに本当にイタリア・オペラの醍醐味を感じさせる上演があったでしょうか? フィレンツェ歌劇場には、オペラ発祥の地としての誇りとオペラを楽しむことへの情熱があふれています。今回の演目には、前回の日本公演でも絶賛を博した『トゥーランドット』と、2006年5月に新演出される『ファルスタッフ』の2作が用意されました。壮大

6月 デボラ・ポラスキー・ソプラノ・リサイタル

世界中の歌劇場で活躍を続けるトップ・スターが聴かせる深きリートの世界。



「ファラオの娘」は、ゴーチエの原作をもとに、マリウス・プティパがロシア帝室バレエのバレエ・マスターに就く前に生み出したと言われる作品で、サントペテルブルクで初演されました。物語は、イギリス人の青年がタイム・スリップし、古代エジプト人タオールとして女王アスピチアとの恋、恋敵の陰謀と対峙するというもので、タオールの愛とロマン、そして波乱万々の冒険が、エジプトを舞台に、ときにはロマンティックに、ときには幻想的に繰り広げられます。ボリショイ・バレエがかもし出す究極のエキゾティシズムの魅力がここに!

11月 ウィーン・クラシックス

モーツァルトのメモリアル・イヤーを盛り上げるウィーン・フィルの若手精鋭たちによる特別編成が実現!



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、“音楽の都”ウィーンにおいて、最も敬愛される音楽家です。生誕250年に当たる2006年にちなみ、日本でも、ウィーン・フィルのメンバー14人による特別編成のアンサンブル「ウィーン・クラシックス」のスペシャル公演が実現することとなりました。このアンサンブルは、弦楽器10名、管楽器4名から成ります。メンバーのなかには、ウィーン・フィルで最年少のヴァイオリン奏者、チェロ奏者、ヴァイオリン奏者と、若手精鋭が揃い、バスーン奏者のミヒャエル・ウェルバをはじめとしたヴェテランたちとともに、醗酵するウィーンのモーツァルトを楽しませてくれるでしょう。時代を超えて息づく伝統の響きに、ウィーンの次代を担う若い世代の感性が吹き込まれた演奏が、モーツァルトのメモリアル・イヤーを盛り上げます。

6月 モーリス・ベジャール・バレエ団

『ベスト・オブ・ベジャール—愛、それはダンス』『バレエ・フォー・ライフ』
巨匠ベジャール率いる精鋭カンパニーの来日。熱狂が約束された究極のダンスと音楽の融合がここに!



『バレエ・フォー・ライフ』

いまや世代を超えて社会現象の高まりをも感じさせている伝説的ロック・グループ、クイーン。ベジャールがこのクイーンとモーツァルトの音楽を使って『バレエ・フォー・ライフ』を創ったのはすでに8年前のことと気付くと、あらためて、その先見性に驚かされます。初めての人はもちろん、再び、三たびの人も、じっとしてはられない、興奮と熱狂の『バレエ・フォー・ライフ』体験。今回もまた、見逃せないはず!

起承転々

vol.160
憂国
佐々木忠次

きていくように思う。言いたい放題はこのコラム始まって以来のことだが、年齢とともにだんだん抑えが利かなくなってきたかもしれない。私が子供の頃は、日本の敵はアメリカやイギリスであり(鬼畜米英報道)、日本は永久に神が護ってくれる(神風が吹いて敵は木っ端微塵と、よく言ったものだ)と、マインド・コントロールされていた。傷の報道、独断と偏見に満ちた報道が怖いことを身にしみて感じている。その思いが15年にも及ぶ間、私に細々とこのコラムを書かせている原動力になっているのかもしれない。時代はどんどん変わり、敵も時代と共に変わってきた。いまや民間事業者の敵は官僚であり、政治家だと言う声さえある。これまで日本を支えてきた優秀な官僚機構も、時代に合わなくなってあちこちから我ながら困ったものだと思っている。先がそんなに長くはないと思うと、国を憂える気持ちが強くなっ

てきのお金によって生計を立てている側で、誤解を恐れずに言えば、会社の社長と社員の関係のようなものだろう。最近の事件を見ていると、警察や国土交通省の役人はけっして給料を払っている社長(=国民)の助けようとはせず、かえって責任を知らず知らずのうちに社長(=国民)に押し付けようとしているようだ。日本はいつから社会主義の国になってしまったのかと思う。こうした国家公務員に対し、いくらお人よしの民間人も黙っているはずがない。最近の新聞から気になった発言を拾ってみた。一橋大学学長だった阿部謹也氏は「意に沿わせるためには脅しも辞さない行政(6月30日付け毎日新聞)」と発言しているが、まったくもって同感だ。私がかつて新国立劇場構想に批判をもち出した頃、補助金削減をちらつかせて、御上の意のままに私の敵に回った人を、いまだ苦々しく思い出す。鳥取県知事・片山善博氏は「公務員になれば仕事が出

てきにくくとも安泰というのは根拠のない神話」としたうえで、「能力が改善されない職員は退場してもらうのは当然」で、「仕事の出来ない職員が多いほど非効率になり、民間企業なら倒産する。不適格な職員に給料を払うような税金の無駄遣いはいけない(6月14日付け朝日新聞)」と述べている。大賛成だ。元ソニー会長の出井伸之氏は「民間は一生懸命に働いて、借金を返してきた。経済にも明るさが見える。それだけに、いっそう『官経済』の効率の低さが際立つ」と指摘したうえで、「今の公務員制度改革が欠かせないと朝日新聞」と語っている。こうした意見に接すると、JR西日本の脱線事故の後、全鉄道会社に「自動制御機」設置の義務化を発表したのも、役人が責任をとりたからではないかと思ってしまう。民間に高い金を払わせて「自動制御機」設置を義務づけて、監督官庁の責任を

年末スペシャル 12/30出発 音楽鑑賞

ウィーン 6日間

1/1ウィーン国立歌劇場「こうもり」鑑賞チケット付

298,000円

(ご旅行代金/大人あ一人様/2名1室利用時)

【参加条件】
 ① 日本航空・フィンランド航空・スカンジナビア航空・フィンランド航空・KLM
 オランダ航空・ルフトハンザドイツ航空・スイスインターナショナルエアラインズ・オーストラリア航空・アリタリア航空のみ
 ② 国内線は全席指定
 ③ 10名(1人参加は1人参加金が必要)その他詳細は弊社impresario/ウェブ掲載の内容に準じます。

【参加期間】
 12月10日(土)11:00~12月14日(水)11:00~12月15日(木)11:00~12月16日(金)11:00~12月17日(土)11:00~

【お問い合わせ先】
 エイ・アイ・エストラベルワンダーランド新橋本社9F 音楽鑑賞専門デスク
 03-5360-4741 FAX 03-5360-4732

株式会社 エイ・アイ・エス